

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520660

研究課題名(和文) 前国家社会の複雑性・複合性の増大過程の比較研究

研究課題名(英文) A comparative study of the developmental process of social complexity and hierarchy in pre-state stage societies

研究代表者

溝口 孝司 (MIZOGUCHI KOJI)

九州大学・比較社会文化研究院・准教授

研究者番号：80264109

研究成果の概要(和文):

本研究は、日本列島とブリテン島という、大陸縁辺部の二つの大規模島嶼部における社会の複雑性・複合性の増大過程を、(1)マクロ・ミクロの集落構造の変容、(2)埋葬プロセス、墓地・墳墓構造の変容、(3)親族構造・組織の変容、の各单元ごとに整理・分析し、さらに、それらの展開過程が、それぞれの地域に認められるネットワークの位相構造的な特性といかに相関するかを検討して、日本列島・ブリテン島という、大陸縁辺島嶼部の位置的・地理的特性が、それぞれの社会の複雑性・複合性の増大過程に与えた影響を二つのモデルに整理した。

研究成果の概要(英文):

This research project compared the developmental process of social complexity and hierarchy between the Japanese Archipelago and the British Isles by examining 1) the transformation of settlement patterns, 2) the transformation of burial systems and mortuary practices, and 3) the transformation of kin-relations/organisation. The outcomes were compared with that of the application of some social network analysis methods, and it was concluded that different network (topological) characteristics, resulting in the generation of different degrees of centralization between the Japanese Archipelago and the British Isles, led to the different trajectories of social development between those regions on the periphery of the Eurasian continent.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野:人文学

科研費の分科・細目:史学・考古学

キーワード:比較考古学 日本考古学 ヨーロッパ考古学 前国家社会 国家形成

1. 研究開始当初の背景

古代国家の形成にむけての社会の複雑性・複合性の増大過程研究は、19世紀から20世紀後半までに形成された歴史民族学や社会人類学的モデルに依拠しておこなわれてきた。グロ

ーバル化の進展と文化・社会的価値観の多様性の認識の深まりとともに、これらのモデルが前提とする西欧中心主義的認識の問題点が指摘されるようになった。その結果、A)批判を摂取しつつモデルの改良を目指す方向性と、B)このよ

うな広義の社会進化を対象とする研究を断念し、特定時代社会の構造的特質の解明と記述に特化する方向性の二者があらわれた。本研究『前国家社会の複雑性・複合性の増大過程の比較研究』は、A)に属するものであるが、いずれの方向性に与するにせよ、このような研究は現存社会の直接観察により遂行可能な性質のものではなく、実証的考古学的研究成果に大きく依拠する必要がある。また、物質資料に遺されたさまざまなパターンを、それを生み出した社会の構造やシステムと結びつけ、それらの変化の要因を特定するためには、互いに離れた地域・時代を異にする文化集団間の様相比較に基づき、パターン・要因のそれぞれに関する、またパターンと要因との結びつき(因果関係)の様態に関する<類比>の作業が重要となる。しかし、文化的価値の相対性の認識や西欧中心主義克服への志向性のひろがりとともに、広義の比較研究・通文化的研究や類比的な研究は回避される傾向が強まっている。フィールド科学としての考古学の性格が、地域史的視点の強調に結びつき、比較や類比的視点の、意図せざる軽視にもつながっている。また、これらのファクターが複合して、前国家社会の構造的特質の把握にも混乱が見られるようになってきている。昨今の日本弥生時代大型集落の性格をめぐる論争(これらは「都市」であるか否か)や、初期国家の定義・認定をめぐる論争(古墳時代は当初から「国家」段階に達していたか否か)も、このような状況の所産と理解できる。

2. 研究の目的

本研究は、以上のような一般的傾向の反省に基づき、古代国家の形成にむけての社会の複雑性・複合性の増大過程の国際比較研究をおこない、考古学的現象における地域間の構造的特質の共通性と差異の双方を意味づけ、位置づけることの可能なモデル・説明枠組みの実証的な構築をおこなうことを目標として実行された。具体的には、大陸縁辺部に位置し、古代帝国の作用圏のなかで国家形成へのあゆみをすすめた日本列島とブリテン島を対象とし、前者の弥生時代から古墳時代、後者の新石器時代終末から鉄器時代にかけての、a)マクロ・ミクロの集落構造の変容、b)埋葬プロセス、墓地・墳墓構造の変容、c)祭祀形態の変容、d)生産・流通形態の変容、e)親族構造・組織の変容、それぞれの実態復元と相互比較をおこない、それぞれの前国家社会の構造的特質を解明するとともに、そのような特質の形成と変化をもたらした要因の共通性と差異に配慮しつつ、両地域における、前国家段階の社会の複雑性・複合性の増大過程をモデル化することを試みた。

3. 研究の方法

以上の実現のために、まず、(1)マクロ・ミクロの集落構造の変容、(2)埋葬プロセス、墓地・墳墓構造の変容、(3)親族構造・組織の変容、以上3項目の、日本列島・ブリテン島それぞれにおける研究史の到達点と、資料状況の把握を試みた。

そして、(1)については、良好に調査された集落遺跡を抽出し、①居住単位とその空間構造・集落内分布、②貯蔵施設の集落内分布・居住単位との位置関係、③種々の作業空間分割の様態、④囲郭施設/防御施設の有無と構造、⑤①～④の時間的変遷、などの属性と、北部九州地域主要集落分布のネットワーク分析の結果の相関を検討した。また、この結果を、ブリテン島南部地域、鉄器時代のヒルフォートを対象として比較検討した。

(2)については、良好に調査された埋葬・墳墓遺跡を抽出し、①埋葬プロセス復元のための資料、②空間構造、③副葬品等諸要素の分類と水平的/垂直的差異化の有無、④②・③と被葬者年齢性別との相関の有無、などの属性に関する検討をおこなった。

(3)については、主に、日本列島における弥生時代～古墳時代の変容プロセスの分析をおこない、それを、ブリテン島新石器時代末から鉄器時代にかけてのプロセスと比較した。

4. 研究成果

(1)マクロ・ミクロの集落構造の変容

①日本列島においては、縄文時代前期以降、一定以上の規模の個々の集落は、一貫して複数の居住集団から構成される。

弥生時代中期以降、小平野程度を単位として、中心的集落と周辺の集落の差異化として特徴づけることが可能な、大規模集落-小規模集落の分化が起きる。しかし、大規模集落中に、即座に、上位層の居住区画('Elite precincts')的ものが出現するわけではなく、むしろ、弥生時代後期前半までは、中心的大規模集落においても、それを構成する複数居住集団間の関係は等質的である。中心的大規模集落のみに、北部九州地域では、墳墓/祖霊祭祀との関連が推定される大型建物、西日本一円では、穀物貯蔵を中心とし、関連祭祀の中心となったと考えられる大型建物が見られることは注意されるべきである。

弥生時代後期後半になると、中心的大規模集落を構成する複数居住集団の特定のものに、溝や土塁に囲まれ、貯蔵施設を多く持ち、住居のほか、特殊な機能を推測させる平地式建物、高床建物、大型堅穴住居などをもつものが出現する。これらは、'Elite precincts'と位置付けて問題ないものと考えられる。

古墳時代前期以降には、これらの'Elite precincts'の基本構造を受け継いだ独立居住単

位が、一般層の集落(それらは、多くの場合依然として複数居住単位から構成され続ける)から離れて営まれるようになる。

古墳時代中期になると、河内平野・奈良盆地などの近畿中枢部、岡山平野地域、北部九州地域などで、そのような Precincts を中心として、農耕集落とともに、鉄製品生産や、その他手工業生産に季節専門的に従事する集団の集落がこれを取り巻き、上位層と、それに従属する下位の親族組織(そのいくつかは季節専門的特殊技術者(外来者を含む)を多く含むような集団である)のピラミッド構造が、景観的に可視化されるような「中心地域」が形成される。これらは、後の「宮都」、「国府」といった統治体制中心地の原型となるような構造体・景観であったと考えられる。

②ブリテン島においては、新石器時代から青銅器時代前半にかけては、集落遺跡そのものの存在が希薄で、通年定住の傾向が薄く、むしろ、牧畜への依存が大きく、移牧的に、居住地の季節移動をおこなっていた可能性が高い。青銅器時代後半からは、単一居住集団から構成される集落、少数の複数居住集団より構成される集落が見られるようになり、定住傾向の定着がうかがえるようになる。これと同時に、いわゆる Celtic Fields とよばれる、時に低い礫によって構築された壁等に区画された耕地の痕跡が見られるようになる。

鉄器時代になると、いわゆる'Hillforts'に代表されるような防御集落の発達をみるが、これらの多くは大量の貯蔵施設に少数の住居跡が付属するという内部構造をもつものが多く、日本列島における弥生時代中期～後期の大規模集落とは異なることに注意する必要がある。

このような Hillforts が散在する景観の中に、ローマ属州化されたゴール(フランス)地域との交流が密接な地域を中心として、大規模な集住地(手工業生産中心地であった痕跡も強い)、いわゆる'Oppida'が出現するが、その段階には、ローマによる属州化は目前にせまっていた。

(2) 埋葬プロセス、墓地・墳墓構造の変容

①日本列島においては、弥生時代を通じて(～後期前半)、各集落を構成する複数居住単位一つ一つに、墓地が付属する構成が一般的であった。それらの墓地は、それぞれさらに、複数の墓群からなることが通例であったが、それらに埋葬される人々の性別・年齢構成は時期ごとに流動的で、かつ、カテゴリー間の関係は、男性優位を強めつつ等質であった。

弥生時代後期になると、埋葬の絶対数が激減し、それとともに、墓地も、特定居住集団に付属したり、中心的大型集落の一隅に集約されたりするようになる。これらの墓地内には、依然として複数の埋葬群が存在するが、それらは溝や墳丘によって明確に区画されたり、饗宴を伴うなんらかな祭祀行為の痕跡をともなう場合が増えてく

る。弥生時代末になると、埋葬される人々の組み合わせは、兄弟姉妹の組み合わせの男女数人十二、三の未成人となり、その埋葬位置も、集落からはなれた丘陵頂であったり、イワクラ的の石組を伴ったりして、「聖別」されたかの様相を強める。

②ブリテン島においては、新石器時代前半期の、いわゆる Long barrows の石室・木室等への、長期にわたる多数埋葬から、新石器時代末～青銅器時代中ごろの、Round barrows への単数埋葬集合、青銅器時代後半期の、いわゆる Urnfields(骨壺原)への埋葬、鉄器時代における埋葬そのものの減少、そして、ローマ属州化直前の、突然のチーフ墓出現、という流れが確認される。

Long barrows に埋葬された人々のカテゴリーは、年齢・性別ともに、おおむね等質であるが、場合によっては、年齢や性別に対応する軟部腐朽後の骨の「置き分け」や、人骨を用いた、長期にわたるさまざまな儀礼の執行が確認され、独特の祖霊概念に基づき、共同体意識の反復的確認がなされていたことはあきらかである。

Round barrows では、被葬者は、個別の人格として葬送され、新石器前半のように、群としての「祖霊化」の対象になることは必ずしもなかったようだ。また、個々のバロウに複数回の埋葬が行われる際には、男性が初葬で、女性/未成人がこれに続く場合が多く、この順番でグループのメンバーが必ずなくなるということは想定できないことから、葬送が、男性優位の社会カテゴリー/諸関係の反復的確認場面として機能していたことが推定される。これに重層するように、多くのバロウ群が線状配置を見せ、複雑な系列形成を見せることから、おそらくは lineage 程度の規模の集団ごとに、その存続をめぐる系譜意識の生成と、系譜間の競争が、大陸から搬入される希少財=威信財をめぐる生起したとお考えられる。

このような流れに対して、青銅器時代後期以降の、埋葬の「質素化」は、大きな問題をなげかけけるが、鉄器時代 Hillforts の様相などと対比するならば、社会集団は、その内部に一定の成層構造を発達させつつも、社会関係は、ある種の「共同性-平等性複合」といったものに依拠して維持されていたものようであり、興味深い。

(3) 親族構造・組織の変容

日本列島・ブリテン島の両者ともに、年齢・性別のカテゴリー間関係が比較的平等な構造から出発したが、前者においては水田稲作農耕の発達とともに、後者においては希少財=威信財流入の増大とともに、男性優位傾向と、lineage 程度を単位とする「系譜意識」の生成が認められた。

殊に興味深く、注意されるべきは、その後の展開であり、列島においては、男性優位-系譜意識の複合は、親族組織分節間関係の成層化、

親族組織間関係の成層化、という、二相の成層化へと進展してゆくのにに対し、ブリテン島においては、親族組織間の成層化、それに基づく地域集団間関係のピラミッド化は、ローマ属州化直前まで認められず、わずかに、(列島のそれと比べると微弱な)親族組織分節間関係の成層化が認められるのみである。

(4)まとめと展望

以上、ことに(3)で顕著に認められた日本、ブリテン島の社会の成層化・複合化にかかわる様相の分岐の背景をさぐるべく、日本列島におけるセミ・マイクロ(北部九州地域:弥生時代中期末)、マクロ(西日本+東日本西部:古墳時代開始期)をそれぞれ分析単位とし、前者においては、小平野程度の集団単位、後者においてはメジャーな河川流域平野単位をそれぞれノードとして、それらの間の交流関係を考古資料から特定して、ネットワーク分析をおこなった。これは、ノード間の交流関係の有無から隣接行列を作成し、位相数学的計算式を用いてそれぞれのノードの位相的位置=「中心性」を算出するものである。この算出によって、ネットワーク構造と、それぞれのノード=社会単位の成層的位置との相関の有無が検証されるのである。

その結果は、セミ・マイクロ、マクロの計算の両者において、1)各ノードの成層的位置関係は、ほぼ、それらのネットワーク的に創発される中心性で説明できるもこと、2)加えて、北部九州地域をほぼ単一窓口とする、アジア大要部との交渉が、両ネットワークの成層化に重要な役割を果たしていたことが演繹された、

これに対して、ブリテン島は、南部海岸地域-フランス ブルターニュ地域、東部地域-フランスカレー周辺、東部/ヨークシャー地域-オランダライン川河口地域と、外部との交渉窓口地域(Gateway communities)が一本化せず、そのため、ネットワーク構造そのものの「中心化」自体が阻害されやすい状況であったことは確実である。

このことが、集落構造、埋葬システム、親族組織、そして、これらの複合としての社会再生産モードにおける「共同性-平等性」の強調につながったと考えられる。

以上、本研究は、日本列島とブリテン島という、大陸縁辺部の大規模島嶼部における社会の複雑性・複合性の増大過程を、(1)マクロ・ミクロの集落構造の変容、(2)埋葬プロセス、墓地・墳墓構造の変容、(3)親族構造・組織の変容、の各単元ごとに整理・分析し、さらに、それらの展開過程が、それぞれの地域に認められるネットワークの位相構造的特性といかに相関するかを検討して、日本列島・ブリテン島という、大陸縁辺島嶼部の位置的・地理的特性が、それぞれの過程に与えた影響を二つのモデルに整理する、という顕著な成果を得た。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

- ① 溝口孝司. 2010. 弥生社会の組織とその成層化: コミュニケーション・偶発性・ネットワーク, *考古学研究*, 57(2): 22-37. (査読無)
- ② Mizoguchi, K. 2009. Nodes and Edges: A network approach to hierarchisation and state formation in Japan. *Journal of Anthropological Archaeology* (28) 1: 14-26. (査読有)

[学会発表](計3件)

- ① 溝口孝司. 弥生社会の組織とその成層化: コミュニケーション・偶発性・ネットワーク, *考古学研究会*, 岡山(2010.04.18).
- ② Mizoguchi, Koji. "Rethinking 'prestige good systems': the self-organization of complexity and hierarchy on the periphery of the empire", *ESF-JSPS Frontier Science Conference Series for Young Researchers Contact Zones of Empires in Asia and Europe: Complexity, Contingency, Causality*, Fukuoka, Japan (2010.03).
- ③ Mizoguchi, Koji. "THE CENTRALIZATION OF POWER AND THE GENERATION OF THE TRANSCENDENTAL: A NETWORK APPROACH TO THE KOFUN (MOUNDED TOMB) PERIOD OF JAPAN", *19TH CONGRESS OF THE INDO-PACIFIC PREHISTORY ASSOCIATION*, Hanoi, Vietnam (2009.12.01)

6. 研究組織

(1)研究代表者

溝口 孝司(MIZOGUCHI KOJI)
九州大学・比較社会文化研究院・准教授
研究者番号: 80264109

(2)研究分担者

田中 良之(TANAKA YOSHIYUKI)
九州大学・比較社会文化研究院・教授
研究者番号: 50128047